■座談会

草根木皮から合成薬まで

——「くすり」の文化史を語る——

（司会）原　椿　矢　梅　木　宮
　　原　数　村　木
　　千　道　雄　高
　　八　治　四　明
　　郎　明　郎　郎

（出席者）三

昭和46年12月9日，於厚生有楽荘

薬は健康を保しむためのもの

原　非常にご多忙中をおいでいただきありがとうございました。

今月号に「くすりの文化史」を特集しますが，私は，薬は食べ物と同じ，生活の一部であるというふうに考えておりますが，今日は医学，薬学の両方の方々に，お集まりいただいたのですが，特に薬学の方が中心になって，たいへんに話していただきたいと考えております。

「くすり」を，広く考えますと——はじめ草根木皮を中心とするような考え方があって，それから有効成分を抽出する。それからそれにつながってゆくようになったかと思いますが，宮本先生，そういう点の考え方を，文化史的なことを心においていただいてお話ししたいんですが。

宮本　少し時代遡った言い方をしますと，やはり，薬というものは，人間の文明が作ってきたものですから，したがって，薬を見れば文明の跡がそこから見られると思いますし，また，今日の薬は当然，文化の所産であると考えますし，人間の文化が，薬のゆかから伺うことができます。

さて，何千年かの人間の医療史で，薬は原始生活のように，一世紀前までは草根木皮であったというなんですが，草根木皮を薬としたお時代と，今日の合成薬を使うような時代との薬の性格を申しましょうか。これはずいぶん違ってきています。そこにいろいろな問題点が提起されます。

それは薬そのものの中身の問題だけでなくて，おのずから文化につながる何かがそこにあるのではないか，まようは，そんな話をしたいと思うんですが，我が国ということで考えてみますと，明治になりまして，医療制度が非常に大きく変えられた。それまで，国民の医療を担っていた漢方が，やがて西欧的な医学に転じていって，それが，国民の既成概念として今日に至った。

この大きな革新を申しましょうか，それを現実にして我が国でも，薬が大きく変ってきたということは言うまでもありません。

わが国とすれば明治の改革でそうした西欧の薬を受入れたということは，要するに西欧文化をわが国に取入れたことにはかならないのですが，そこに考察すべき問題があると思いますが，いかがでしょうか，木村先生に。

木村　薬という字が漢字で，英語でメディシンと言えば，楽しむ，という字から成り立っているとも言われておりますが，楽しむということは健康なくしてはありえないのですから，健康管理に寄与するところの——草根木皮が薬であるとも，また，これは漢の時代に，そういう思想でもって薬という字が生まれたと私は思っている。

それにゃ何かさこに，そういうことを言う根拠があるかということが問題ですが，これはあとで宮本先生から御話がでてくると思うんですが……。今から，一八〇〇年前頃といわれておるんですけれども，神農本草経という本草書が中国でできているんです。これは本草書としては最初のもので，それからいろんな本草書が出ていますが，百種を変えて百種として今日に至った。

この大きな革新を申しましょうか，それを現実にして我が国でも，薬が大きく変ってきたということは言うまでもありません。

わが国とすれば明治の改革でそうした西欧の薬を受入れたということは，要するに西欧文化をわが国に取入れたことにはかならないのですが，そこに考察すべき問題があると思いますが，いかがでしょうか，木村先生に。

木村　第一，薬という字が漢字で，英語でメディシンと言えば，楽しむ，という字から成り立っているとも言われておりますが，楽しむということは健康なくしてはありえないのですから，健康管理に寄与するところの——草根木皮が薬であるとも，また，これは漢の時代に，そういう思想でもって薬という字が生まれたと私は思っている。

それにゃ何かさこに，そういうことを言う根拠があるかということが問題ですが，これはあとで宮本先生から御話がでてくると思うんですが……。今から，一八〇〇年頃前といわれておるんですけれども，神農本草経という本草書が中国でできているんです。これは本草書としては最初のもので，それからいろんな本草書が出ていますが，百種を変えて百えば，神農本草経は中国における薬物学第一版とでも言いましょうか。

今から一八〇〇年前ですから，ずいぶん昔のことですが，当時の薬用されたと思われる中から三六五品目の薬がそれに収録されている。科学が開発される以前の古人の力，大変なお非常に興味があると思うことはこの神農本草経に収録された三六五種目の薬物を上薬，中薬，下薬という三つに分類していることです。

そして上薬は三二種で延年益寿となるもので，命を養うことを主とし，無毒であり，やや多服しても害がないから，身を軽くし，気を益し，不老延年を保する者の飲むべき薬であり，中薬は三九種で二二種あり，性を補うことを主とし，有毒なものと無毒なものがあるから適宜斟酌して用いるもので，病を治し，体力を補うために用いるが，下薬は使用薬で三二種があり，毒が多いから適用するものではなく，病を除くために用いるものとしています。これを要するに神農本草経の薬物は，何分にもおよそ一八〇〇年前の古代科学時代のことであり，五つ四時季節とともに神仏万物の思想が加味されていますが，とともに身を軽くし，気を益し，不老延年を飲むこと，は健康管理の要諦であり，上薬の中にもいろいろ不適当と思われる薬物もあるが，大体に於て今日の医療薬に相当するものと思われましょう。

なおついでながら今の話に出てきた者，附，仙茅薬のことですが，漢方の薬典の一つといわれる『薬征』によりますと『附を正とするこれを附子といい，茎を抜くこれを茎といい，根に附するこれを根といい……上薬を茎となし，中薬を附となし，下薬を根となす』としています。

すなわち漢方薬はほとんど単味で用いることがなくて，いわゆる茎，附，仙茅薬を調合して薬効の相乗作用を博し，一医薬者を診療するように工夫されており，これは洋方での生剤，合剤，混注剤，調剤に匹敵するようで，用法を吟味すれば薬効の安全性を期待できると思われるものが多いようです。

元年科学研究の進展につれて薬剤学の成分や薬効を追究解明されていますが，上薬に属するものにはあまり強い作用の成分を有するものが少ないのに反して，中薬や下薬には アルカロイドとか，サポニンとか，スチロイド系の成分が多いようで，これらの成分や薬物を結晶するために近代的科学的配慮がなされ来たことも興味ある事実だと思う。

椿　八郎氏（編集委員）　原　三郎氏（編集委員）　梅原千治氏（東京医科大学教授）

あまり調製上加工しない、天然の薬物を調合し、これを本草的に五剤、それぞれの有効成分が抽出されて科学的に薬効が証明、ないし明確されるのであり、即刻にインスタント時代とはいいながら薬効を証明するには、このような的に力も敢えて無視できないものがあろうと思います。

私は「くすり」はすべて漢方薬といった狭い見解を持っているわけではありません。今日は恐らく漢方や民間の立場から話を進めるよう要望されていると思いますのであんまりなぜ。

椿　末村先生の支部の集の分け方ですね。これは、人間の活動をはじめからこう考えていたんじゃないかと思うんですが、病人を、普通に働く人間と、これからもっと働くなければいけない人間と、こういうように三色に分けていた点生学じゃないでしょうか。

末村　そういう考え方もあるでしょうね。

椿　支部という国は、人間の多い国ですから、経験でもって割り出してきているんだと思う。経験の結果、そういう分類になったという考え方はありませんか。

末村　それが例えば、上薬というものが当時、どういうものを選んでおったかということも見るから、大体、そういうお考えも働んですよ。

上薬には、飲みが現在食用に供しているところの「ゴマ」であるとか、それから「チンセンドクガ」とか「ヤクイモ」であるとか、本草に薬食に書かれた食品みたいなもので、食品のように思いてもいいものがかいわけですが、今日から見ては上薬としても問題の薬物もあって再検討を要するわけです。

今の「薬」という字の意味からみて、中国では病気をなおす――というよりも、病気にならないような生い方をしたということ。

これは、今の中国を旅行いたしましても、大体、薬屋の看板には「人参」とか「鹿茸」とか、そういう病気のつくような薬の看板が豆腐の一枚看板になっていますよ。

小泉人は、いかに日常生活の上で、健康管理に関係するところの、そういう努力形とか、効果強化剤を用いているかということが問題ですね。

椿　末村先生から漢方が出たから、広い意味では病理、あるいはギリシャ、ヨーロッパから始まる西欧的な考え方の動きを一つ、宮本先生に。

宮本　今ですね、一千何年か前の中国で、

宮本高明氏（国立予防衛生研究所食品衛生部長）　末村雄四郎氏（日本薬学会常任幹事）　矢数道明氏（漢方医）

そういうふうな考え方がとにかくでき上っていたという、古代中国における文化的背景がどうであったか、その当時の社会における医療のあり方との関連はどうか、私にはよく解りませんけれども、それを考えてみますと、西洋にしてもそうでしょう、古代ギリシャなどでは、もちろん今日のように病気というものを、客観的にとらえたんじゃなくて、「病気」なるものは、神の怒りであるとか、悪魔の仕わざであると考えて、それに対して薬というものが用いられた。病気を飲ませるのに、おこしている悪しきものを、はから早く取除くことが、病気をおさえることとして、なくものや下すものを、自分たちの環境、自然界から見つけて使っていた。考え方はそうであったが、実は、それが今日の「比較」「了解」の急区の始まりだと言われていますね。

くすりの語源はくすること

椿　矢数さんは、漢方の専家と理解で、西洋医学を見たから、東洋医学、漢方薬を例いたいと思います。

矢数　宮本先生の本題の「くすり」と、平民本草書いたほうがいいというお話がありましたが、先輩末村先生からお話しおかったこのパンフレット、内閣法制局の「くすり百科」というのがでて、私もそれをこの間見てきたんですが、たしかにくすりと書いてある。

末村先生から漢字のほうのお話がございましたけれども、日本語のこのく、す、り、というのは、これは薬物ではなくて、物理療法なんでくすりをけずるから――すぐることなんだそうですね。それは、薬物入れるんでしょうね。医療の原始形態を原始医学から比較医学、魔法医学、宗教医学、それから科学的な医学、それから近代の実証医学というふうに、だんだん発展していった。

一ばん最初に、やっぱり病気をとれ、すべて手もってなでるでしょう、撫療、子供の頃い所をなでるように。これは、私が言うのではなくて、平賀晋民先生と共著しているんですが、「漢方医学」という本がございまして、その中に平田篤胤が日本古来の薬を研究して、漢方入れてみても、漢方はかりにかなくて、ほんとうの日本の伝統的な、いわゆる治療、大和方というものを発揮しなくちゃいかん、ということを強調した人で、その平田篤胤が「古史伝」という

本でもって、薬の説明を日本語にしているわけです。

日本のくすりというのは、ようすること。でありなどでなおすということが言われます。平田篤胤は、そういう霊術で病気治方を発展するために、江戸時代の末期に何とかしてこれを次成しようと思って頑をかけるんですね。その頑をかけに、どこへ行ったかというと、宮城県の平泉の祝部神社に三日間参籠するんですね。そこは日本の医療神少彦名命を祭ったところです。そして、日本在来のほんとうの医学を何とか創作って、これを世の中に出そうとして努力するんですが、そこまで体系ができなかったんですね。

しかし、「大同類聚方」なんて、日本の在来の医療を集大成したものがあるんですけれども、これはどうも私自読んでも解らないんですが、これは日本在来の民間薬を、神社や寺院の所に伝承してきたものを全部、網羅したんですね。これはやっぱり古代日本の文化遺産でしょうね。我々読めないんだけれど、ドイツ人でこれを読んで学位論文を作った人があるんですね。これは、ボン大学の教授をやっておったオットカーという人なんですが、日本に来て高等学校のドイツ語の先生をしておって、非常に日本文化を研究し、「鳥獣」の研究という本も書いたことがある人で、私もいままで病治か手紙のやりとりをしてるんですが、非常に日本語の研究をよくしております。

木村　今、どこにおりますか？

矢数　今、ドイツのフランクフルトにおります。私の弟の本をドイツ語に訳して出版しました。そういうようなわけで、今の「大同類聚方」の研究ですもの、ボン大学に論文を出したんです。驚くべき日本語ですね。

さて金沢大付属病院から薬学の「薬」の章カンムリに、楽しいという字の話がありましたが、解釈を変えると、草カンムリに「楽」ですね。病気で苦しんでいる者が、その苦しみが楽になる草だという意味にも解釈する人があるんですね。

それから、先程の「神農本草経」の思想がだんだん年代が進むにしたがって、日本では江戸時代の中期になってくると、本草経の評判が落ちてくるんです。本草経の評価を高めたのは、何故かというと、実証的な方面が、薬の性質や使い方を考えると、神農本草経は、実際の哲学的な思想のものとに、観念論的だとけなしていることに対して批判的になってきました。その代表者が吉益東洞でした。

吉益東洞は日本医学のルネッサンスを敢行したといわれて、かなり実証的な方法を用い、その門人から医学に入るものが出てきました。日本の医学の発達の頂点に立っているわけですね。

内科医のくすりは外科医のメス

薬　内分泌薬というホルモンはこんなに勉強している人はないと思うんだけれども、どういうふうに、薬を考えているか聞きたいんです。梅原さん。

梅原　私は内科医ですから、外科医のメスに当るものが内科医の薬になるというふうに思っているわけです。いろいろなお話の中から思いついたのですが、そのメスも、今日の電気メスとか、いろんなメスになるまでには、ずっと昔から、石器時代から神からの授物の歴史があっこわけで、それと同じようなナンセンスで、薬も開発されてきたように思われました。

先程、矢数先生が「ハスリ」は、たべることから始まる――とおっしゃいましたけれど

も、私の小さいときに、金魚にひいじいさんがおりまして、ヨチンヂイヂイ、おじいさんがということで、「ヨチンヂイヂイ」と言って、なでてなおすことを得意にしておりましたが、あういうのが、日本の薬の原型、いや医療の原型を伝えているものなのでしょうか。

木村　今でも指圧療法なんてありますね。

梅原　あります。あれもやはり、古い医療の主要なものかもしれないと思っております。例はやはり、薬は外科医のメスのようなもの、シャープな切れ味のよいものを使えということになるんで、そういう点で、薬の本質といったものに対して、もっと深い関心がなければいけないと思います。やはり、薬を使うには、何と言いますか、ヤロ加減ということが非常に重要なことになるんだろうと。

薬　それとやっぱりつたがっておると思うんですけれども、化学的に単純に、ただ学問的に考えると、ホルモンとか、その領域の薬品が個々に独立してやったがっていないとしても、資材として使い方は出てくるんでしょうね。

梅原　そのホルモンというのは、もう何じょうに薬になってしまったんです。草根木皮というものは次々、人間が自然界にあるもので、昔段食べてたものを食べる、というような話だからの薬ではなかったか、と思いますけれども、今の例えば「インシュリン」や「性腺ホルモン」にしても、自然に人間の体の中にあるものを取出して薬として使っている、というようなことになりましたね。

薬　楽しむ――というところはないでしょう。

梅原　楽しむものはシンナーぐらいじゃないですか。（笑声）

良薬は口に苦し

樽　宮本先生ね、薬というものはにがい。大概のものはにがい。なのでみると、「くすり」の「ク」は、「にがい――という字じゃないでしょうか。おそらく、神農が草をなめて、それで薬になるようなものというのは、みんな苦かったんじゃないかと思うんです。

宮本　それはこういう話があるんです。十八世紀イギリスの話ですけれども、大へん薬に熱心なストーンという牧師さんがおりまして、その頃はまだまだ、ご承知のように、いろいろな病気がヨーロッパに流行していたわけです。彼の信条では、病気のあるところには必ずその薬を神がおいて下さる。と確信していた。それで毎朝の多い地方の「おこり」の治療のために、その牧師さんが薬を探しとやり方がおもしろい。木の皮を噛んで苦いのを探した。当時のキナ皮の苦さに学んだので

す。

僕はその話を読みまして、これはヨーロッパにも沖縄さんがいるな、と思った。それで結局彼の炭を見つけた。北村先生、彼の炭は苦いですか。

木村 にがい。

宮本 それを薬にしたわけです。やがてその成分が後生研究され、サラチル酸を経て現はアスピリンが生まれたわけで――とにかく味わってみてまいものは薬――というのは実西洋流のようです。

木村 〝良薬口に苦し〟という諺があるけれども。

原 それは、ウ頭でできた諺ですかね。

木村 その諺の起源はずいぶん古いもので矢敗先生にお答え願いましょう。

ところで私は戦時中南方を旅行いたしまして薬用資源の調査をしたことがあります。従軍されていた矢敗先生もずいぶん現地で苦労されたようですが、日本軍が南方に進駐して一番困ったのは苦味強壮薬ですよ。これがなくて非常に困った。

ところが、日本からの輸送船はしばしば途中で撃沈して届かないということで、ひとこうではお手上げですね。それで私、行きまして、非常に困っておる実情を見ましたものですから、ジャワに滞在中に、「アンドログラフィス・パニキュラータ Andrographis paniculata」という薬草、これは「キツネノマゴ科」の一種草で、当時の伝聞インドシナ（今の南ベトナム）でもその薬草を苦味薬として「ヌチ・ヴァ・ヴァラ Nuc Dua Vara」つまり「苦味の王者」で大変尊重しておりました。

原 それはひどく苦いですか。

木村 非常に苦いので、私は薬剤がおってはいかんので、早速ドゴールの植物園の文献について調べてみると、各地で苦味強壮薬としている事実もあるので、早速現地の陸軍病院で強壮薬を試験し、南方軍全部は採用し陸地月話されたことがある。

これは非常に苦いものですよ。その苦味成分は全草に含まれるアンドログラホリッドと称する苦味質で、日本にもって帰り近藤千三郎教授のところで研究をしてもらいましたが、現在ではその化学構造も薬理作用も確認されています。薬というものは、苦いものが多いですね。キニーネも苦いけれども。

宮本 まあ、成分的に苦いでも苦いんじゃないですか。化学的なことだけではもちろんないと思いますけれども。しかし矢敗先生のお話にあったように〝良薬〟なぞというのは、昔は甘い、大へん大切な薬でしょう。

矢敗 「良薬は口に苦し」というのは「孔子家語」にはじまるものこそ確分方くからいわれているわけですね。しかし漢方のほうでは薬草草根樹皮薬の味を五つに分け、五味といって、甘、酸、苦、辛、鹹、その五つの味わいが、肝、心、脾、肺、腎の五臓に効能物性があるというんです。胃は甘いものを欲する、それが過ぎると胃が悪くなるよう、心臓は苦いもの、肝は酸を、腎は鹹を欲するんですね。

見方を変えるといろいろ調合まぜ、苦い薬が入れば、必ずそれを和らげる甘い薬が入る。病によっては甘い薬を入れないという処方がある。

先程のお話の、私、南方に参りまして、宮本先生のおっしゃった〝その土地でできた病気には、その土地になおるものがある〟という――これを〝身土不二〟の原則といいますが、これはまあ一つの代表的な例で、いまでもしゃべったりおに思いたりしたんですが、私のおりましたブーンゲル島には〝薬蛇科〟の植物がたくさんあったんです。じんましんを起こす――それはすごいもんです。

那くらいもある大きさの葉っぱですよ。もっと大きいのも――それがジャングルの中に密生していました。これにさわると瞬間に真っ赤になりまして、それがなおるのに一週間くらいかかる。最初の二日間くらいは大へんな苦しみで、手の付けようがないんです。

あるとき私は部落を訪問して原住民に、これにさわって痛いときにはどうするんだ、と聞いたんです。そうしたら、原住民が、蕃刀を持ってそのジャングルの中を探しておって、ドクイモの茎をサッと切りまして、その汁をつけるんだ、ジャヌチャアで教えてくれた。それで私は、すぐにその〝薬蛇科〟の植物にさわったところが、針をさすような痛みと発赤が起ってきましたから、茎の切り口をすぐにつけたんですが、これは瞬間的におっちゃった。中和剤等の効がある。薬蛇科植物には鎮痛が入っている、と言ってるんですが、手の茎にはそれを中和するものがあるんですね。

これは日本でも、蜂や蜘に刺されたときには手の茎をつけろ――とおいますね。そういう一つのジャングルの中に無尽蔵を起こすその〝薬蛇科〟の植物と、それをなおすドクイモの茎がある。自然の摂理というか、これが非常に面白いと思ってよく例に引くんですが、〝ヤコーネ〟は、たしかにマラリヤの多い所にあるんですね。これは非常に苦いです。しかし私のおったブーンゲル島にはヤコーネがない。その代りに〝ジャコタイ〟という大木なんですが、その皮をひくと、真白い汁がでれまして、それがキニーネと同じように苦いんです。原住民は、それをマラリヤに使ってるんです。私、それを大量に採りまして飲ませたんですが、これは程ってお飲ませたんです。そうすると強壮作用があるんです。

これは、英国の熱帯の中に〝強壮剤〟として、〝ヤナ皮〟に代用するということが書いてありました。原住民は汁を絞ってうすめて飲むんです。熱のあるときに。

明 点呼するときにずっと笑はせておいて一杯ずつ飲ませたんです。グラム換で相当強烈に効きますね。

矢敗 まあそういうわけで、苦い薬が強壮剤に効くということがわかったんですが、初じたものはマラリヤの蚊にはあまりなかった。かえってぐんぐん熱が出てきました。当ろが、私たちのその島ではサツマイモを高粱して食べておったんです。みんな胸やけと強烈に困っておったんですが、胸やけとガスがピタッと止まっちゃったんです。これは、強壮剤の原理の方がよく現れたんです。

宮本 薬理学的ですね。いきなり臨床試験で……いいデータを出しになった。

できたときのモノを「ラチブリン」と名付けました。ビタミンと、これは乳どとに効くんです。くんくんするんです。

それで私が実験を始めて、第既部が「第壁部」という新しい名をつけて出って、後性の、悪性のマラリヤに新しい療法を開拓しました。

金のくすり

樽　宮本先生、欧州では、金金属あるいは宝石を薬に使った所がありますね。これはどういう原理ですか　かおのかみ物は、なおるというわけですか。

宮本　あれは、思想的に言えば、昔の中国の不老の薬に、金が何よりとされたことに通ずるのでしょうね。つまり、金というのは変らざる性質のものというところからです。練金術では金に到達することを目的としていた。ただし信仰心もあずかっていたが、とにかく不変のもの、永遠のものだという考え方ですね。

宝石もそうではないでしょうか。不変のもの、貴重なものが薬になると考えたのでしょう。ルメラルドもルビーもあるから、それぞれに何かの効果を期待したわけです。ルメラルドをまぶたにおしつけて眼病がなおる、女性のくるぶしにつけるとお産が楽になる、というように、もっとも宝石は女性には万能薬でしょうね。

樽　金は永遠の生命――ということに結びついたものですか。

木村　宮本先生、このごろ、金箔の入ったお酒があるでしょう。あれはどうですか。

樽　あれも同じ思想でしょうね。

木村　酒だけは「真珠」も使いますね。

矢敷　白内障に――。

樽　真珠をそのまんま、いい真珠ですね。本物です。ぎょたの中に入れてマッサージして頭をなおそうという、そういう方法があるんです。これは、トラコーマの放置した時代に、われわれはトラコーマをなおすために、マッサージということをやるんです。それの代わりですね。真珠というものは、なぬかかすから、角膜にオクつかないんですよ。ですから入れてマッサージしても――実際にガラス玉を入れてマッサージした患者があるんです。

矢敷　金の話ですが、漢方の処方の中で「紫雪」というのがあるんです。薬の色と書く。それから「紅雪」赤い色に出来上がる。「銀雪」といって黄色で出来上がる「紫雪」もあるんです。この「紫雪」を作るとき金を使うんです。ですから、普通の人は持っていないので昔は名が作ったんです。

樽　金のインゴットは高いですね。

矢敷　金に出来上がりますね。

宮本　それは「コロイド」ですね。

矢敷　江戸の昔には、非常に薬を作るのが好きで、薬をして自分で薬のかま（釜）を作って、その中に金の円盤をぶげるように入れて金属を作ったという話を聞いたことがあるんですが、「紫雪」という薬は、その当時、詐欺がなかったので、気絶した人を治療するのに医師であったわけです。その気絶をした人に対して、粗鉄を通じて早く蘇生させ薬効を効果させようと工夫をした。これは昔の時代の千金方に記載されているんですから、一、三〇〇年も前のことでそうそう古いわけですね。

その製剤を口に入れるとすぐ目が醒めるように現在にはいってくるんです。何かに中毒したとき、鼻先薬心でもって気絶したときに使ったわけです。そのような製剤技術があの当時にあったということは、実験医学の製剤技術はすごかったものだと思うんです。

木村　今、加賀の金沢に造っていますね。多少内容が違うかもしれませんが――。

宮本　むかし「サノクリジン」という抗結核薬がありましたね。有機合剤ですね。あれをお部でちょっとお作ろうというので、三井さんなどの財団がお金を出して研究したことがあるんですが、前西部に部先生からうかがったことがあります。また貴新性ゴールドが別がんに使われますね。

樽原　これはリウマチの治療にも使えるとして評価価値を高くお使いますね。どうして効くのかよくわかりませんけれども、リウマチにはたいへんよく効きます。

矢敷　金には解毒作用があるというのはどうなんですか。「瓦石散」という、中国でもすごく流行した不老長生の薬があって、無害を起こしたことがありましたが、一時はその五石散に中毒して、後遺に黒ずんとして残れて知っておったといわれている。その五石散の中毒のときに、今の「紫雪」を使っているようですけれども。

合成薬品の強い効果と副作用

樽　少し話が混乱になりますが――。無――ないえば、現在では医療品、医療薬品でいいけれども、お医者さんや薬剤師さんの収入に関係するようなこと、誤らしてはいけませんが、そういう問題で、今の薬の製薬法、あるいは薬剤に使う原料の治療法での実際はこれでよろしいでしょうか。やっぱり私は、薬というものは患者と相対的にあるものですから今の薬の製造法および薬剤応用に対して少し考えないといけないんじゃないかと思っております。病人の立場で考えてどうですか。

曽原　ひかしは薬は混ぜ合わせていればーッタメエして調合し患者に渡したわけですが、最近、薬剤が非常にたくさんになり、混ぜ合わせができないものですから、やたらにたくさんになってもちゃうんです。いかにもたくさん飲む、馬の薬だなんて思ロを言われることになる。そういう意味で昔のようにやはり、手間がかかるが一緒にまぜたほうがよいのでしょう。もちろん実際、たくさん使えば効かるということもありましょうけれども。

いまの若い人たちは、自分で自分の為方の薬を飲みたいとどのくらいの量になるかということが見当がつかない。処方だけ書きますが、もちった人は、馬の薬みたいに多くなってまとまうわけですよ。それで逆に胃をこわしちゃうかもしれないのですよ。

木村　そこで先刻の上薬、中薬、下薬にたいする認識が問題になろうかと思うんです。

原　そうですね。少し論争のほうがいいな。

木村　反論をするわけではないが、ひとロに薬といってもいろいろ上薬、中薬、下薬によって用い方にそれぞれ、相違があるということ。上薬は病気になる前に強壮強健に――予防するということ――。

原　たとえ――ということは、病気にならんようにするあるから。

木村　それで中国における「くすり」本来の生い立ちというのは、病気にならないように飲っていった。患者を相手でなくて健康人をねらの、より一層強健になることを願った――ことは私は思うんです。広い意味のくすりというのは――。

原　しかし、病気は現実に起ずるあるから。

木村　あるから、そういう薬は下薬を用いる。ただし用く本来に害害の恐れもあるから、それは使用してはいけないということを戒めている。

原　いま、先生に言われる、薬を多くしひ――という面に、多少ったがりますが、「後漢薬」と称する薬では、自分の美しみ半分で飲

むんでしょうか。しかし、一面に、種屋教授なんかが扱う、「ステロイド」の薬なんか、たしかに助けると思います。殆ど真に、恐ろしさを覚えていますね。

木村　それはやはり下薬ですよ。

旅　下薬だけれども、出様から言えば非常にとがったメスですよ、このへんを一つ。

梅原　荒刃のメスですよ。

梅原　そう思います。よく切れ、興奮に刺作用も強いから荒刃のメス。メス代わりに使うようなクスリになりましたね。「ジキタリス」もそれが――。あれはこいへんむずかしいんです。ひかり、ジキタリスが使えるようになったら、一人前の医者になったと。それがむずかしいんですよ。なんて僕は驚かされましたですよ。

木村　病気では「大麻」を上手に使う者が一人前だという。薬は使い方がお前にむずかしい。たとえばが病気ありましょうとも。

梅　ステロイドは効果もあるんですよ。それを、皆様と、製作用とはっきり知ることが大切なんです。先生、どうなんです、それは。

梅原　「ステロイド」の使い方の話をしてよろしいのですか。芸術からは離れて学術的になりますが。

　ステロイドを使うのにはどこからの心構えが必要なのです。どの病気にも同じ考えでは使えないのです。ステロイドでなければ絶対だめだという病気もあるわけです。たとえば、「アデソン病」とか「ケイハン病」とか。これはステロイドがなければ死んじゃうわけです。ステロイドのおかげでアデソン病の患者が、もう十年も生きていて、高血圧になってしまった例があります。アデソン病の高血圧なんて、ひとむかし前は考えられなかったんですけれど、長く生きて年をとりますから、高血圧が出てきてしまう。

　こういう難病の病気は、絶対にステロイドでなければ他に代用品はないんですから。一生使うという覚悟で使うわけです。ミラマチとか、気管支喘息というようなものを相手とする場合は、ひかしはアーストチャイエだったけれども、いまは、ほかのもので代用できればそれも。それでだめならば、ステロイドを使うという病院にかわりました。

　それにしてもたとえば、ミラマチの七十歳のおばあさんがいて、便所にも行けず痛い痛いと毎日騒いでいたとする。しかし、ステロイドは危険だからやめておく――というようになりますが。

　ステロイドを使うのにはどこからの心構えが必要なのです。どの病気にも同じ考えでは使えないのです。ステロイドでなければ絶対だめだという病気もあるわけです。たとえば、「アデソン病」とか「ケイハン病」とか。これはステロイドがなければ死んじゃうわけです。ステロイドのおかげでアデソン病の患者が、もう十年も生きていて、高血圧になってしまった例があります。アデソン病の高血圧なんて、ひとむかし前は考えられなかったんですけれど、長く生きて年をとりますから、高血圧が出てきてしまう。

　こういう難病の病気は、絶対にステロイドでなければ他に代用品はないんですから。一生使うという覚悟で使うわけです。ミラマチとか、気管支喘息というようなものを相手とする場合は、ひかしはアーストチャイエだったけれども、いまは、ほかのもので代用できればそれも。それでだめならば、ステロイドを使うという病院にかわりました。

　それにしてもたとえば、ミラマチの七十歳のおばあさんがいて、便所にも行けず痛い痛いと毎日騒いでいたとする。しかし、ステロイドは危険だからやめておく――というようなものです。

　やはり、自分の身のまわりができるならば、彼は少しの危険があっても使うべきだと思っています。まわりの人も薬です。本人も薬なんですから、こんなときには使うべきだと思うんです。

　これはむしろ社会的な問題を考えることです。まわりの家族の問題までも含めて考えてやらなければならんと思います。それから「アレルギー」問題。たとえば「薬疹」のような場合は使わなくてもなおるかもしれませんけれども、使えば早くなおる。そういう重物で使います。これは、皮膚病患者で使うべきですね。皮疹にぜんぜん効かずまたはできない病気があります。「ランバ肉腫」とか「ランバ性白血病」のような悪性腫瘍には、どのくらいいいコンザレッチンに保たせるかを目的にして使用するわけでしてね。あんまり製作用とは考えないで、薬剤に使ってもいいんじゃないかと思っています。

　やはり人を見て法を説くのじゃなくて、相手の病気を見て、その使い方を考えていかなければいけないと思うのです。

旅　大切なところなんです。要するに、切れるメスは病室に到着して、薬害を防ぐということですね。

宮本　薬が殺されて排泄されるまでの間というのは、薬とは別にもとりますけれども、一般に生の作用を受けるを、ある異常状態にからだがおかれるということに間違いございませんね。でですから、そこから出てくるのが、その様急後遺に応じて、製作用であり、毒性であるということでして、さきほどもメスと表現に申しあげましたのがそこなんで、私はやっぱり、天然の生薬類が何が少ないんだとは断言しませんけれども、少くとも、今日の純粋の合成薬品とは違って、効果は体像にあらわれるであろう、体々にあらわれるというと、漢方の先生に怒られちゃうけれども。

　いま、梅原先生がおっしゃったように、ステロイド剤を使わずして、在宅したものというのはたしかに理想ですよ。純粋で非常に異物的ですから、まさに人間のからだにとっても、それだけに、からだにはいったときにおかれる異常さというのは、生薬類に比べることのできない激しさがある。

梅　ぜんぜん違う。毒物的。

宮本　逆に薬剤の試験におかれるということは、かからだの治療機能を助けることになるとも考えられる。どういうような異常な状態におかれる。ばらばらな一つ一つの作用で考えられない。統合的に全体的な何かがあって――そのへんがですね、薬理学の大切なところでしょう。

梅　また、医療の主体でもありますね。

宮本　まさにそれは、梅原と薬理の共同の一つの問題であり、またそれを通見することが今後の薬を、原先生に言わせると悪しいものにさせなければ――。

原　薬のことを論じるには、薬の社会性ともいいましょうか。薬の商品性ということが、やはり、患者にたいする関係も、医は一致しなくてもいいかんと思います。それを通業したら、医学じゃありませんよ。人を想今学問は、推やすこと――それが医学と薬学とあわせて医の社会性と思います。商人に関切であることが医のただひとつの使命でしょう。薬の商品性が悪化なってはいけませんよ。恐ろしいような気がするんだ、僕は。

正薬類の毒物

木村　そこでせい正薬類が真実に近きている。「薬の文化史」というような話題に――。

原　そうですね。薬に歴史的な出来のものはありませんか。

宮本　それよりも、薬をテーマにした歴史はございませんか。

原　僕はそれに非常に興味をもっている。

梅原　「万葉集」の中には薬が出てくるんだ。

ですか。たとえば、うなぎを食べたらいい――というのは出てくるかもしれないけれども、薬草が出てこないんでしょうかね。

蕗　「薬」ととくに取り上げたものはありませんね。薬草につながるものはあります。

木村　私はこの間、たまたま万葉時代の歌人が薬草にどのような関心をもっていたかということを調べたことがあるんですが、「薬」については、とくに取り上げて詠んだものはありませんね。

勉強になる草木については詠まれたものには『かきつばたに惚りつけた大夫のきそひ飲する月は来にけり』――これは大伴宿禰の詠んだもので五月の薬猟に出かけるときのいでたちを詠んだようですが、『薬は民部卿のそ御石部卿が八ヤのもまたに満へる花や誰』など歌石部卿がたれか卿のことをその花を観賞測として用いることなどがわかります。

宮本　先生は、これは薬に関係あるんですが、今、思い出したのは、仏教に「七薬八部」という薬師の慧眼があるんですね。ふと、を見てみますと、実際にいろいろな薬草が図形的に書いてある。

樺　絵がかいてあるんですか。

宮本　五色天神なんかにもありますね。大部八種のほう、すばらしい絵だそうです。絵図があるんです。一つ一つはよくてもわかない、私には。

木村　仏教の大師八種や上野の五条天神のほかに広尾の大林寺、このお寺は江戸時代の寛永十五年にできた薬草園の跡地の隣接地にありますが、いずれも天井に相撲色に描かれた薬草図ですが、そのうち改めて具体的に調べてみたいと思います。

蕗　薬草等一つ教えて薬にはいろいろ――。

宮本　薬草部来といえば、これは薬に関係はあるけれども、あんまり引っぱりこひと薬師様に怒られちゃう。

矢数　芸術と結びつく一つに「図鑑」があります。

木村　それから私は日本の漢方を研究するうえにも日本の薬の文化史のうえからも、東洋の正倉院の薬物に触れてみたいと思います。おそらく地上に現存する世界最古の薬物として、古代の処方ともいうべき秘本中の薬物を現物で示す唯一のものであり、東洋医学で扱う薬物の正しい伝統を例証にする貴重なものでありまして、奈良朝の天平文化を解明するうえにも、またこれに対応する大陸文化を理解するうえにも有力な証拠品です。

聖武天皇大寺の正倉院宝庫の北倉に現存する薬物目録は、他の宝物とともに天平勝宝八年（西暦七五六年ですが）六月二十一日、孝謙天皇と光明皇太后とが全聖霊天皇の御願の七十七日忌に際しまして東大寺盧舎那仏（大仏）にその品目、数量、納期を明記した薬物第一名簿・薬帳とともに献納された六十種の薬剤で、宮内省と民外省として献物薬剤品目は外に薬用、香薬用、染料、顔料、その他の工芸用などの目的で官庁に納められた由緒の明らかな薬物で、すでに十二世紀の古籍を載っております。

幸いに明治二十三年いらい、四年にわたって朝比奈泰吉博士を首班とする十余名の科学者団による薬物調査が組織されまして、近代科学のメスをふるったのです。その成果がたとえば①種々薬剤の薬物、②種々薬剤外の薬物、③正倉院薬物の本草学上の位置、④正倉院薬物の産地、⑤正倉院薬物の実際医学上の位置、⑥正倉院薬物の経年変化と薬物の保存法、⑦薬物調査の意義とその意義などにつき詳細に調査され、朝比奈泰吉博士、三者院薬物（一九五五年）として刊行されています。

蕗　簡知のように正倉院薬物の性格は種々薬剤の意味に記された記文にもあるように、宮内に安置して薬剤に供養する他、もし病者になりて用うべきには広く施行的愛情と公共性とをもって病院に供されたもので、以後百年間にわたって施薬院や一般薬用として施民に至るまで出開された記録も間存し、薬物も数行の六・種の多も、四十種に現存するといわれます。詳しいことは今日は時間がありませんので――。

蕗　いまのお話はたいへん貴重なことですね。それから今の漢方ブームというのはどういうことなんですか？

矢数　私は、今の科学的医学というものが非常に進んで進みすぎて、疲れたし、あまりに人間から離れすぎた感じになってきている、――これはもう事実、医学例として現代医学者の中から自覚的にそれが指摘されてきていますね。

そうすると、すぎたのを、もとに戻すには、やっぱり、この辺けくな、自然に即応した東洋医学の中に、何かがあるんじゃないか、東洋医学によって、そういう行き過ぎを是正しようという考えが、自然的に起こってきたんじゃないかと思う。

ブームとでて、今の医学がそこへ転換してゆく一つの現象だと思うんですが、今後国際的にそういう方向に向かって研究してゆくと思う。中国がすでにそれを実践していると思うんですが、近代医学のいいところと、東洋医学のいいところとお互いがその特質を認めあって、お互いが独立して、両方を異れ自えに美しいその材料が、東洋にはあるんじゃないかと、こういうふうに見ております。薬剤の有効論は自然宝庫の人間的要素ではないかと思うのです。

木村　私は東洋医学とか、西洋医学とかいうことではなくて、やはり、人類の健康を守るためにはできるだけ自然にかえることが望ましいのではないですか。後世の知でもあまり、不自然な状態になって人間の健康はよくなるんですよ。つまりて自然に戻ろうなど手術をいたしたいものですね。

宮本　なかなか、もう、自然には戻れませんね。

木村　いや、それはみんなの心がけ一つだと思います。私は薬草天神から出かけて一万歩を歩き、新宿中央物を女性誌に取り入れてできるだけ自然に戻るよう心がけている。これは自然食品における大きな「くすり」だと思っています。

蕗　だから、基本観念としては「原始本能」のもとにかえる――それから発温した部類は科学的に把握し、相手はそこに帰って、やはり、薬に薬し切と。だから薬で、どんなに悪いと薬を使う場合にも、もとの精神は守るべきだと思うんです。

――たいへん長い間どもありがとうございました。難しいですが、本日はこれで――。

（了）